〈青森県史〉の窓 142

江戸時代の医者
～盛岡藩御役医田島家～

相馬英生
（弘前大学国史研究会会員）

三戸町の二日町で現在も医業を営む田島家は、盛岡藩役医の系譜を継ぐ家で、現当主の剛一氏で10代目となる。役医とは盛岡藩の各代官所管轄内に1名から2名ほど置かれ、普段は町医者として生計を立てる一方、藩から命じられた医療を行う、いわば嘱託医である。

同家初代の友寂は、沼宮内（岩手県岩手町）で医者として財をなし、息子友仙を盛岡城下（同盛岡市）での医者修行へ送り出した。修行を終えた友仙は一度沼宮内へ戻った後に三戸で開業し、1737（元文2）年12月、藩から役医に任じられた。

その後も役医として続いた田島家の中で、同家発展の礎を築いたと評されるのが5代目玄庵である（「田島家系図」）。彼の医者としての名声は高く、老いてなお周囲の要望に応じて治療を行っていたという。

そして、1868（慶応4）年3月、なんと75歳にして、盛岡藩士大島高任らが設立した洋学校である日新堂の医学寮（医学部）から、「種痘術免状」他二つの文書を交付された。これらは盛岡藩内での種痘（天然痘の予防接種）実施の許可書、種痘後の術後観察、医学寮への学費納入と補習の指示について記されており、盛岡藩で現存する唯一のものである。

ここで、玄庵の役医としての活躍ぶりを「御用療治容体書留」（以下「容体書留」）から紹介したい。この書留は役医として藩から命じられた医療行為について報告したものの控えであり、現代のカルテにあたるものといえよう。

1850（嘉永3）年4月10日、密通していた人妻の「とく」と「丑蔵」が、城山（三戸城跡）で自害しているのが見つかった。しかし、まだ息のあった丑蔵の治療を命じられた玄庵は、次のように藩へ報告した。

「丑蔵は切腹しており、ヘソ下から横に傷口が4寸位（約12センチ）広がっていた。また大腸を傷つけ、大腸が残らず外へ出た状態であった。大腸の傷を約1寸（約3センチ）3針縫合し、大腸を腹の中へ収めた。腹部の傷も7針ほど縫合したが、脈は弱く手足は冷たい。正午から午後2時ごろまで治療したが、助かるかどうかわからない。」

1868（明治元）年7月、奥羽越列藩同盟を脱退した秋田藩に対し、盛岡藩は攻撃を開始した。三戸給人（三戸在住の武士）も動員され、死者や負傷者が出た。この負傷者の1人に、鉄砲弾によって薬指を負傷した松尾益太郎がいた。玄庵は「特に重症ではない。しだいに良くなるだろう」として、膏薬（塗薬）による治療を9月9日から行った。その結果、10月25日に全快したと記されている。

それからおよそ150年後の2003（平成15）年、松尾家から三戸町に両手の篭手がない具足が寄贈された。同家では、秋田藩との戦闘で被弾し失ったと伝えられており、その事実が「容体書留」からも裏付けられたといえよう。

その他「容体書留」には、痔、風邪、眩暈、脚気、疝癪（さしこみ）、浮腫（むくみ）、疝気（下腹部痛）、心下痞（みぞおちの痛み）、中風（脳卒中後の半身不随）、瘧疾（おこり）、癲癇（たむし）など、江戸時代の人が患った病気や怪我の症状や治療の様子が克明に記されている。

現当主の剛一氏は「非常時に公のために奉仕する心構えは、先祖にあやかりたいものです」と静かに語る。役医の精神は脈々と受け継がれている。

田島家御役医関係資料より薬箱
（田島剛一さん所蔵、『青森県史資料編近世6 幕末・維新期の北奥』にも掲載）